に奥書、會所奉行・改作奉行・兩人奥印に而御添印を取、町肝煎へ渡候得者、入立に指出し、會所・場印合せ、其上に銀子受取、切手小拂奉行宛所に而、肝煎共切手を右紙面之前に繼立、末々町同心中加奥書、其奥に又銀子可被相渡与申奥書印に而、銀子請取之月日之所に重而御添印を請、會所銀留へ出し、場印を銀高に合し、扨小拂に向はせ候事。

一、御飾方を初、御施行方・御作事方、都而所々御入用帳不殘取揃へ、尤會所方に而之御入用茂帳面認、何茂相揃候上、惣御入用帳面出來し、御法事御奉行宛所に而、會所奉行・改作奉行兩判印に而、帳面指出し候事。

加賀藩御定書巻十三

江戸會所御定書

一 江戸會所貸銀之儀覺

會所裁許御貸銀、今般借用被仰付儀御座候得者、間も無御座候間、當分頭・支配等之奥書迄に而貸渡候樣可仕候、請人者於御國相立候樣詮議可仕旨、奥村内記申渡候に付、奉伺候所、御添書を以被仰渡候趣、謹而奉拜戴候。内記儀は右之通可相心得旨申聞候に付、掃部に示談仕候處、先年御納戸銀を以御貸渡被下候儀有之時分、右之趣を以御貸渡被遊候儀茂御座候間、當分頭・支配奥書迄に而貸渡、請人於御國早速相立候樣に可仕旨奉存候に付、言上仕候。以上。

月　日　　名

右之趣候得者事濟、委細承届候。

一、江戸御廻米船、伊豆浦より此方に而破損有之節者、與力右御用に彼地に罷越候。其節會所銀借足可仕候。他國より他國に罷越儀候間、增借をも可仕候。右願申候者、御留守居衆御用人等申談次第貸渡可申旨、前田伴四郎に横山大和守殿御申渡候事。

但、常之借足之儀は紙面に茂不及、過借り願之節は三人衆より紙面請候而貸渡可申事。

一、享保十年春御歸國被遊候節、御供人或御先或は御跡より罷歸候者に、會所裁許御貸銀御貸渡之砌、請人指支候に付、江戸より御國に罷歸候而請人早速相立可申旨證文相調、頭・支配人奥書左之通に而貸渡候事。

右誰借用銀相違無之候。於御國早速請人爲相立、會所銀御格之通證文調、此證文与取替、日切之通爲致返上可申候。以上。

誰　印

右月切日切は、御格之通當十二月十五日、利足一歩充之事。

唯今は五充。

二 下行所品々御定

御貸馬飼料等代一日之當分根積。